

# チャタトンの影の下に

— 英国ロマン派の3人のカメレオン詩人たち —

Under the Shadow of Chatterton:  
Three Chameleon Poets of the English Romanticism

Chatterton shall appear modernized.--S. T. Coleridge

Poets & the best of them, are a very cameleonic race.--P. B. Shelley

What shocks the virtuous philosopher, delights the camelion Poet.--John Keats

楚 輪 松 人

Matsuto SOWA

## はじめに

トマス・チャタトン(Thomas Chatterton, 1752-70)の再評価は、1987年出版のPeter Ackroydの小説*Chatterton*によって火がつけられた。歴史上の虚実を織りませ、話術巧みにペテンと詐欺を物語った“贋作小説”の傑作である。続いて、そのアクロイドも簡潔な「序文」を寄せているNick Groom編纂によ

る本格的なチャタトン研究の論文集、*Thomas Chatterton and Romantic Culture* (1999)<sup>1</sup>がこの作家の見直し、その復活の気運を促した。<sup>2</sup>

史実では、チャタトンの生涯は1752年11月10日に始まり、1770年8月24日に終わる。享年17歳9ヶ月。18歳の誕生日を迎えるのにまだ3ヶ月足りない若さでの自殺であった。そ

1 この論文集は多角的な視点からなる論文集ではあるものの、『トマス・チャタトンとロマン派のカルチャー』という表題とは裏腹に、チャタトンを18世紀のコンテクストに置く。考察の大半が18世紀から所謂「プレロマン派」と称される頃までを扱っており、ブレイクやワーズワス以降のロマン派詩人たちの取り扱いに物足りなさの感があるのは否めない。しかし、究極的には、ブレイク、コールリッジ、キーツの<sup>アーキタイプ</sup>霊感源としてのチャタトン像を確立するために、新しいコンテクストでチャタトンを捉え直し、英文学における原型の人物として復活させようとしている点には多いに評価しなければならない。

論文集の編者は「序文」でチャタトンを“mercurial” (Groom 5) と形容している。この着想は敷衍すれば興味深いチャタトン像の探求となっていたことだろう。というのも“mercurial”とは、大文字で書けばローマ神話の“Mercury” [マーキュリー、ラテン名メルクリウス/ギリシア神話のヘルメス] の形容詞であって、マーキュリーが神々の使者で雄弁・技術・盗賊の守護神であること、その星である水星の影響下で生まれた者は、巧妙、発明の才に富んだ詐欺師であるからである。それは機知縦横の作家チャタトンの実像に他ならない。

尚、「プレ・ロマン派」について一言。『ロマン主義から象徴主義へ シンポジウム英米文学4』(学生社, 1975)には次のような説明がある。「プレ・ロマン派あるいはプレ・ロマンティズムという名称は、文学史上明確に定義された用語ではなく、その使用を差控える学者も少なくない。しかし一般には一七八九年以前に最盛期を迎えた十八世紀詩人のうち、何らかの面で次の時代の思想的、文学的特徴を示している者を個々にプレ・ロマン派と呼び、その特徴を総括してプレロマンティズムと呼ぶようである。具体的に詩人の名をあげればトムソン、ヤング、グレイ、コリンズ、スマート、チャタトン、クーパー、バーンス等が主なもので、場合によってはゴールドスミスも数えられる」(高橋 156)。このように英文学史ではチャタトンを「プレ・ロマン派」の一員、あるいはロマン派の先駆けとして捉えている。しかし、チャタトンの決定版のテキスト *The Complete Works of Thomas Chatterton* (1971) の編者 Donald S. Taylor がその研究書 *Thomas Chatterton's Art: Experiments in Imagined History* (1978) で示唆しているように、また、前述の論文集 *Thomas Chatterton and Romantic Culture* (1999) の多くの論者が実証しているように、実像のチャタトンは18世紀の詩人であり、彼を新古典主義のコンテクストに置くことこそ妥当な評価と言わなければならない。これまではロマン派研究者のロマンティックなチャタトン幻想が彼をロマン派の方に引き寄せ過ぎたと言わなければならない。

2 *LRB* に掲載された Terry Eagleton のエッセイ、Nick Groom の新刊書 *The Forger's Shadow: How Forgery Changed the Course of Literature* (2002) についての書評はリーダーなエッセイである。また、我が国では川村泉氏の研究書 (1935) に続いて、先頃、宇佐見道雄氏の『早すぎた天才』(2002) が上梓されたことは慶賀すべきことである。

の死から7年後、*Poems supposed to have been written at Bristol, by Thomas Rowley and others in the Fifteenth Century* (1777) が刊行され、その早熟な才能の開花、そして誰からも顧みられることなく死んだ無残な死は、後代の詩人たちの想像力を掻き立てることになる。後代に人々に「不遇の天才」として記憶されているチャタトンについて特筆すべきことは次の3点であろう。

(1) 贋作文士 中世への情熱に燃えたチャタトンは、15世紀の架空の詩人、修道士 Thomas Rowley の名を借りて擬古体の詩篇『ローリー詩篇』"Rowley Pomes" を著した卓越した贋作文士であったこと。

(2) 早熟の天才 チャタトンの早熟な才能は、未だ16歳にならぬうちから架空の詩人を仕立て、『ローリー詩篇』の大半を仕上げたことだと言われている。*The Savage God: A Study of Suicide* (1971) の著者 A. Alvarez によれば、チャタトンはその早熟さゆえに、「自殺した文学者のなかで最も有名」(Alvarez 210) な天才なのである。

その早熟について、ハズリット (William Hazlitt, 1778-1830) は、講演集 *Lectures on the English Poets* (1818) の第六講義で次のように言っている。

チャタトンの作品は、それが書かれた時の作者の年齢が並はずれていたということ以外、何か特別なものを見出せません。そこには、巧さ、活力、そして知識があります。16歳の少年にしては驚異的なものですが、20歳の大人であれば驚くには当たりません。彼が示したのは並はずれた天才の力ではなく、並はずれた早熟でした。たとえ長生きしても、もっとうまく書けていたとも思われません。彼自身もこのことに気づいていたのでしょう。さもなければ自殺などしなかったでしょ

う。(Hazlitt 122)

ハズリットによれば、劇作家でもあったチャタトンはドラマチックな自殺、すなわち一世一代の大芝居、良く言えば華麗なる自己劇化、悪く言えば自作自演の猿芝居を遂げることで、後代の詩人たちにとって象徴的存在となったわけである。

(3) “詩人の宿命”の体現者 チャタトンの悲惨な結末はと言えば、1770年の4月、彼は故郷ブリストルを後にしてロンドンに上京するが、困窮を極め、飢えに迫り、4ヶ月も経たないうちに砒素を仰ぐことになる。無論、17歳で死んだとき、チャタトン自身はロマン主義復興が彼の後に続く夢にも思わなかったし、また、後続の詩人たち、特にロマン派をリードした主要な詩人たちの靈感源になったことや、彼らが彼の影響下に生きることも夢想だにしなかった。

しかし、彼の没年に生まれたワーズワス (William Wordsworth, 1770-1850) は、「決意と独立」"Resolution and Independence" (May 3-June 4, 1802執筆) の第7連で、すべての詩人に襲いかかる可能性のある運命、すなわち「売れない詩人」=「失望と狂気」の結末というロマン主義的神話を構築した。ワーズワスは「失望と狂気」の最期を迎えた偉大な詩人たち、すなわち破滅した詩人の系譜をたどりながら、「詩人の宿命」について歌うのである。「我ら詩人は、若い頃には喜びのうちにその生涯を始めるが、結局はその喜びから失意と狂気がやってくる」"We Poets in our youth begin in gladness, / But thereof come in the end despondency and madness." と。その含意するところはワーズワスの不安、すなわちチャタトン、バーンズを襲った不運厄災が、やがて自分にも襲いかかる可能性のあることの予見である。チャタトンに言及してワーズワスは歌う。「驚異の少年チャタ

トン／誇りに死にせし、眠らざる魂」  
 "Chatterton, the marvellous Boy, / The  
 sleepless Soul that perished in his pride."  
 この「驚異の少年」という表現は、チャタ  
 トンの別名として英文学史にその名を留めるこ  
 とになった。否、むしろ不朽の名声を刻印す  
 ることになったのである。OEDがこのテク  
 ストを "pride" 3. a. の定義の具体例として  
 引証しているように。

不遇の死を遂げたチャタトン。今尚、  
 前ロマン派の詩人の一人として語り継がれる。  
 だが、小論の目的は、伝承を含め、最新の資  
 料をもとにチャタトンの実像の再構築を試み  
 ることではない。その目的は、生前に無視さ  
 れても、決して忘却の淵に沈むことはなかつ  
 た詩人チャタトンの影の下に生きた3人のロ  
 マン派詩人についての考察である。具体的  
 に、チャタトンが影響を与えた詩人、コール  
 リッジ (S. T. Coleridge, 1772-1834), シェ  
 リー (P. B. Shelley, 1792-1822), キーツ  
 (John Keats, 1795-1821) のそれぞれがチャ  
 タトンの面影に見たものが何であったのか、  
 さらにその面影に自己をどのように投射して  
 いったのか、それぞれのチャタトン幻想を明  
 らかにする。そして結論としてすぐれた詩人  
 の特性とは何であるのかを考察したい。

### 第1章 面影のチャタトン

チャタトンの名は、生前も没後も、多くの  
 イギリス文士にとって聞き慣れた言葉となつ  
 た。この若き詩人の名は遠くアメリカの地にも  
 及ぶことになる。<sup>3</sup> 実際、チャタトンは、  
 文字通り、毀誉褒貶の相半ばする人物である。

その評価は、以下の(1)悪名、(2)名声、  
 (3)その折衷のいずれかの範疇に属する。

(1)「驚異の悪ガキ」チャタトンが生き  
 ていた18世紀はゴシック・リバイバルが流行  
 しイギリスを席捲していた時代である。文壇  
 の大御所ウォルポール (Horace Walpole,  
 1717-97) にとって、擬古体で捏造した自作  
 の詩文を15世紀の作と偽って発表しようとし  
 たチャタトンは「驚異の悪ガキ」"Wonderful  
 whelp" (Mullan 25) に他ならない。時は偽  
 造や捏造が横行した時代でもあった。チャ  
 タトンは贋作文士たち——フランス生まれの謎  
 の台湾人 George Psalmanazar (c. 1679-176  
 3), 非在のケルト詩人 Ossian を英訳した  
 James Macpherson (1736-96), Shakespeare  
 の自筆原稿を偽造した William Henry  
 Ireland (1777-1835) ——らに勝るとも劣らな  
 い少年犯罪者であった (Haywood)。ウォル  
 ポールは *The Gentleman's Magazine* に再録  
 された手紙、*The Miscellanies of Thomas  
 Chatterton* の編纂者宛の手紙の一節でチャ  
 タトンの道徳心、道義的節操の欠如を指摘し  
 て次のように言う。

All the house of forgery are relations.  
 捏造の家の者はすべて親戚である。もつ  
 ともチャタトンの思い出のために一言い  
 ておけば、彼は、貧乏だからといって一  
 族のもっと富める者に対して、自分も同  
 じ一族郎党ではないか、と主張することは  
 はなかった。しかし、彼が文体や(伝え  
 られるところによれば)筆跡を巧妙に偽  
 造する者であることを考えれば、今度は  
 散文で約束手形をたやすく模倣するよう

3 Herman Melville (1819-91) の短編 "Bartleby, the Scrivener" (1853) に、Byron と共に Chatterton の名が言及される。すでに研究者たちが指摘しているように、メルヴィルはチャタトンを「精神分裂症」schizophrenia と考えて、バートルビー [ほとんど口をきかない変人の法律事務所の書記で、精神分裂病患者とも解釈される主人公] の物語に活用したのであろうか。チャタトンが「精神分裂症」であったかどうかはともかく、彼がプリストルで法律事務所の書記をしていたことは史実である。詳しくは Maryhelen C. Harmon, "Melville's "Borrowed Personage": Bartleby and Thomas Chatterton." *A Journal of the American Renaissance* 33 (1987): 35-44 を参照のこと。

になっていたかもしれない。(Walpole 194)

また、私的な手紙では、チャタトンが贋作を売り込もうとしたことについて次のように言う。「彼は、たとえ未成年でも、完全なる天才であると同時に完全なる悪党であり得ることの生きた見本である」("He was an instance that a complete genius and a complete rogue can be formed before a man is of age." Letter to William Mason; July 24, 1778; Wintle 160) と。

また、当時の桂冠詩人(1813-43)、サウジー(Robert Southey, 1774-1843)は、神童どころか小賢しい食わせ者であるとして、完全に無視を決め込む。「チャタトンについて話すのは、〈時代〉が興味を持ったこともなければ、これからも持つこともないであろう名前について言及することだ」("To speak of Chatterton, is to touch upon a name from which time neither has nor will take any of its interest."; Phillips 18) と。

(2) 悲劇のヒーロー 他方、「不遇の天才」の代名詞になったチャタトンには、英雄

崇拝にも似た賛辞さえ送られることになる。ヴィクトリア朝時代のロセッティ(D. G. Rossetti, 1828-82)にとって、彼はまさしく<sup>アイドル</sup>偶像であった。手紙のなかで彼は明言する。「『ローリー詩篇』の最上のもは、断固、英語で書かれた最上の詩歌に比肩する。彼は絶対的な、汚れなき英雄であった」The finest of the Rowley poems . . . rank absolutely with the finest poetry in the language . . . He was an absolute and untarnished hero (To Hall Caine; Wintle 160).

(3) 反逆児のカリスマ 前述のハズリットによれば、チャタトンの低からぬ評価は、その作品ではなくその<sup>ライフスタイル</sup>生き方によって授けられたということであった。20世紀の芸術家にとっては、チャタトンは反体制派の<sup>アーキタイプ</sup>芸術家の原型である。現代イギリスの<sup>ゲルレー</sup>ファッション・デザイナーの<sup>グー</sup>権威であり、1970年代のパンク・ミュージック[体制化したロック音楽への反撥から生まれた攻撃的なロック]の生みの親であるマクラレン(Malcolm McLaren, 1947-) <sup>4</sup> は、Tate Britain 所蔵の一枚の絵画、ラファエロ前派の周辺画家の一人であるウォリス

4 マクラレンはイギリスのパンクロックグループ Sex Pistols の元マネージャー兼ミュージシャンであった。自分の経営する London のブティック Sex に入入りする若者を集めて、イギリスのパンクロックを代表するグループ The Sex Pistols (1975-78) を結成し、反社会的で怒れる若者の代表として売り出すことに成功した人物である。

5 Henry Wallis: *The Death of Chatterton* [1856. Oil on canvas, 24 1/2 x 36 3/4 in. Tate Britain, London] は、ウォリスにより描かれた作家列伝の一枚をなす作品である。すなわち、"Wallis' choice of subject matter in this picture has first to be seen in the context of a small group of paintings exhibited by him in which he depicted scenes and incidents with strong literary associations: his subjects included Dr. Johnson, Shakespeare (both exh. 1854), Andrew Marvell (1856), Montaigne (1857) and Sir Walter Raleigh (1858 and 1862). Of all these it was 'Chatterton' which established the artist's reputation in his lifetime and which has remained since then as certainly his best known work and one of the most familiar of all nineteenth-century British pictures." (Hamlyn)

無論、ウォリスが評判を獲得するためには大いなる後ろ盾があった。当時の美術界の大御所、John Ruskin (1819-1900) による絶賛である。曰く。"Faultless and wonderful: a most noble example of the great school. Examine it well inch by inch: it is one of the pictures which intend and accomplish the entire placing before your eyes of an actual fact - and that a solemn one. Give it much time" (Ruskin, XIV, 60).

尚、この絵のチャタトンは死んでいるのであって、決して寝ているのではない。古代ギリシア以来の美術における伝統的な死者のポーズを表す型が存在する。例えば、Michelangelo (1745-1564) の《ピエタ》(*Pietà*, c. 1498-99), Pontormo (1445-1556) の《十字架降下》(*Deposition*, c. 1528), Parmigianino (1503-40) の《首の長い聖母》(*Madonna of the Long Neck*, 1534-40) などの諸作品に明らかなように、死体となったイエス・キリストは、美術における約束事に忠実に、目を閉じて体を斜めにして、片手をだらんと下げ、足を半ば開いた不可解な型をしている。死者と寝ている人との違いを形の上で表すときには、死者の場合はかならず片手を下げるという型があるからである(小松 28-30)。ウォリスがこの絵で示唆しようとしているのは、チャタトンは「詩の世界の殉教者」ということであろうか。

(Henry Wallis, 1830-1916) の描いた *The Death of Chatterton* (1856)<sup>5</sup> を次のように解釈している。絵の横に配置された説明板からの文章である。

ヘンリー・ウォリスの1856年の絵画、《チャタトンの死》は、馬鹿馬鹿しいほど支離滅裂で、狂信的で、混乱に満ち満ちており、示唆に富み、しばしば理解不可能である。にもかかわらず、絵画は自説に対しては自信満々で確信しきっており、その恐ろしいばかりの落ち着きぶりは実に堂に入っている。《チャタトンの死》は、純粹で混じりけのないファッションであり、それゆえ非常に現代的であり、雑誌 *Dazed and Confused* の表紙よりも断然すぐれている。それはファッションへと翻訳されたセックスであり、そのため呪物フェティッシュとなっている。呪物崇拜とは青春の具体化である。というのも、青春は、不遜に振る舞い、おのれの不滅を信じ、薬物に手を出さざるを得ないからであり、そしてチャタトンはそれを実行した。チャタトンは、人生と向き合っ、反抗したいという青春の必然的な願望を象徴し、剃刀の刃で、生と死の境を身をもって経験しているのである。

マクラレンがチャタトンに見る面影は、若者の呪物崇拜 fetishism, 不遜 irreverence, 不滅性 immortality への信念、そして麻薬常用者の面影である。興味深いことに、ロセッティもマクラレンもチャタトンの「無垢」immaculacy を強調している。前者は「汚れなき英雄」untarnished hero と、後者は「純粹で混じりけのないファッション」pure unadulterated fashion と、いずれも聖者の面影をチャタトンに見ているのである。

見る者によってさまざまに形を変える幻想 chimera, あるいは面影 simulacrum として

のチャタトンの虚像、さまざまな矛盾や相克を組み合わせる多様な像を結ぶ詩人像。メルヴィルが「パートビー」で示唆したように、もし実像のチャタトンが「スキゾフレニア」[相互に矛盾対立する性質の共存状態]であるとすれば大いにあり得ることである。まさしく変幻する詩人チャタトン。そしてその点にこそチャタトンの面白さがある。何が真実で何が嘘なのかを見究めることよりも、虚実皮膜、あるいは虚実裏表の世界で戯れる楽しさを教えてくれるチャタトン。彼こそ隠れもないチャタトン伝説の創始者なのだから。

## 第2章 コールリッジの「チャタトンの死を悼むモノディ」

アクロイドは小説『チャタトン』で、剽窃と捏造をテーマとして、主人公のチャタトンや脇役の詐欺師たちの生涯を描いている。本章はその「偽造の達人」チャタトンと「稀代の剽窃家」コールリッジの異様な取り合わせである。二人の共通点は、先ず第一に、いずれも「慈善学校の男子生徒」だったことである。チャタトンはブリストルの慈善学校、Edward Colston (1636-1721) が創立したコスルトンホスピタル校 Colston's Hospital の生徒であった。"On Observing a Blossom on the First of February 1796"という詩で、コールリッジはチャタトンを「ブリストルの楽人、驚嘆すべき少年」"Bristowa's bard, the wondrous boy! (Coleridge I, 149) と謳っている。

コールリッジ自身のブルーコート・ボーイぶりは、幼なじみの親友 ラム (Charles Lamb, 1775-1834) の素描スケッチに窺われる。幼くして父を失い、母と別れて、少年コールリッジはロンドンのクライスツホスピタル Christ's Hospital で、ひとり寄宿舎生活に耐えながら、驚くべき神童ぶりを発揮してい

た。*The Essays of Elia* (1823)に収録された"Christ's Hospital Five and Thirty Years Ago"の終わりの部分で、ラムの記憶は少年コールリッジの姿を召喚する。

サミュエル・テイラー・コールリッジよ——論理家，哲学者，詩人よ！ 偶然に廻廊を過ぎ行く人も立ち止まり，（若い *Mirandula* の言論と服装との不釣合を考えながら）君が深い，また美しい調子で，*Jamblichus* や *Plotinus* の神秘を（その若い年代にあっても，このような哲学上の飲み物に辟易して色を変えることはなかったが）語り，あるいはギリシア語をもって *Homer* や *Pindar* を誘し，また一方に古い *Grey Friars* の周壁が靈感を受けた慈善学校の少年の音調に反響を起しているのに驚嘆して聴き入っているのを見たことであらう！（*Lamb* 30-31）

ラムによる「回想のコールリッジ」はピンダロス *Pindar* を読んでいる。このピンダロスの影響を受けて書かれた詩，処女詩集 *Poems on the Various Subjects* (1796) の巻頭詩として、「最初に本の形で印刷された詩」（*Freeman* 328）こそ，本章のメインテキスト，「チャタトンの死を悼むモノディ」（"Monody on the Death of Chatterton"）である。

あまり著名ではないこの哀悼詩の初稿は，コールリッジが13歳で，クライスツホスピタルの生徒だった頃の作である。この段階では，コールリッジがチャタトンの自殺に共感していたことは，わずかに最後の数行に見られるだけであった。チャタトンが自殺した下宿 Mrs. Angel's, 39 Brooke Street, Holborn

は，クライスツホスピタル [ロンドンの St. Paul's の北方，Newgate Street の北側，かつての Grey Friars の修道院の跡地] の正門から歩いて数分の所にある。後に「18歳で服毒自殺したチャタトンに関するモノディ——16歳の作者によって書かれたもの」"A Monody on Chatterton, who poisoned himself at the age of eighteen--written by the author at the age of sixteen" と題されることになった詩には，詩人チャタトンへの共感，あるいは対抗意識を窺うことも可能である。その後，コールリッジはこの詩に加筆・修正して，もとの長さのほとんど二倍 [1790年版のモノディは全部で8連90行，1790年-1834年版は15連165行] に引き延ばした。

分類こそ "Juvenile Poems" となっているが，この詩の内実は，「初期の詩」どころか，I. A. Gordon が "Far from being an early poem, the *Monody* . . . is one of the last things that Coleridge wrote, and certainly his last poem of importance" (Gordon 67) と結論するように，この詩こそコールリッジのアルファにしてオメガ，最初にして最後の重要な詩である。最終的な形に至るまでに44年間もの歳月を要した詩 (*Freeman* 329) は，詩人がその生涯の大部分，すなわち13歳であった1785年から没年の1834年までのおよそ半生記の間，ことある毎に手を入れ続けた，文字通りコールリッジの畢生の佳作とも言うべきテキストなのである。<sup>6</sup>

この詩には7種のテキストが存在するが，Gordon はそれを5つに大別し，その変遷の過程を *The Pindaric Original* → *The Version of 1794* → *The Version of 1796* → *The Versions of 1797 and 1803* → *The*

6 David Fairer が "Chatterton's Poetic Afterlife, 1770-1794: A Context for Coleridge's Monody" (*Groom* 228-52) という論文で，このモノディを分析しているが，詩人がその生涯にわたって改作し続けた詩であったことを考えれば，そのコンテキストを1770-1794年と期間限定したことには物足りなさが残る。

*Versions of 1829 and 1834*とたどりながら、その変遷を「モノディは形を変えての発展—韻律の不規則なピンダロス風オードからロマン派風のオードへ、さらにオードからジョンソン博士風のカブレットによる最終版へと推移する」（Gordon 50）と説明する。最初の1790年のピンダロス風のモノディは明らかに記憶の継ぎはぎ細工であり、それ以降の版と読み比べてみれば、この哀歌が言わば《錬金術詩》となっていることが判明する。詩に仕組まれた言葉遣いや先行詩人からの借用語など、卑金属が黄金に変わるという錬金術の行程が詩の詩作の行程と比喩的にパラレルな関係にあり、コールリッジの錬金術 [= 想像力] によって、次元の低い詩が純化されて、やがて次元の高い詩に変容する構造とパラレルになっている。この詩こそ *Kubla Khan* (1797) や *The Rime of the Ancient Mariner* (1798) を生み出すことになる例の錬金術の始まりとも解釈できるのである。

それぞれの版により詩の重点は異なるものの、その底流として一貫して流れているテーマは、詩の表題、すなわち「チャタトンの死について」の詩人の個人的な哀歌である。慈善学校の男子生徒のロマンチックな憧れから始まり、コールリッジ自身の欲求不満の具体化としてのチャタトン像である。換言すれば、精神分析でいう「投影／投射」[自己のうちにある観念や情緒などが受け入れがたいとき、それを他者や物に属するものとして知覚する機制] である。率直に言って、コールリッジの自己詐術とでもいうべきものがこの詩には在る。Gordon は、コールリッジの描くチャタトン像を次のように説明する。「彼はロマンティックなポーズを演じているコールリッジ自身に他ならない。自己憐憫、自殺の気配、処女地である荒野への逃亡、そして自己本位なメランコリーはすべて、18世紀のチャタ

ンのゴシック趣味的なロマン主義というよりもむしろ、コールリッジの初期ロマン主義的な態度の特徴である」（Gordon 60）と。

ここで、読者は、ワーズワスの前述の「決意と独立」の第6連でほめかされていた「詩人の宿命」を思い起こさねばなるまい。ワーズワスは詩人の境涯を次のように歌っている。

私はこれまでの生涯を楽しい思いで生きて来た。

まるでなすべき仕事はただ自然の恩恵を享樂することだけ、とでもいうように。いつも温かな親切心に富む、温かな信念を抱く者には、

まるで必要なものはすべて求めずとも与えられる、とでもいうように。

だが、自ら少しも心を用いない者に、他人が彼のために力を貸し、

生活を助けてくれること、また、その必要に応じて、

愛してくれることをなど、期待できるものだろうか。

後半の3行の原文を示せば、"But how can He expect that others should / Build for him, sow for him, and at his call / Love him, who for himself will take no heed at all?" となる。ここに出てくる代名詞 "he" を一般に人を指す代名詞と解釈することは可能である。しかし、Harold Bloom 他編注による詩文選の脚注には、"Coleridge, not just anyone" (Bloom II. 170) とはっきり明示されている。換言すれば、ワーズワスのいうところに従えば、読者は、コールリッジのなかにも第7連で展開される破滅型の詩人としての本質、すなわち自己憐憫や自殺志願の自己陶酔症を見抜き、彼の詩にそれを読み込まなければならぬということである。確かに、このモノディは自殺志願の自己陶酔者によ

る憂鬱な哀歌である。

事実、他人 [チャタトン] を称賛して憐れむと同時に、自己 [コールリッジ] への沈潜、自己憐憫に耽溺するというナルシズム。ここにあるのはチャタトンではなくコールリッジの自画像、<sup>セルフ・ポートレート</sup>チャタトン=コールリッジという詩人像であると言えるかもしれない。それはチャタトンの死の原因についての瞑想、イギリス社会が詩人を冷遇することへの私的な義憤である。<sup>7</sup>

コールリッジは祖国イギリスが、自由の精神を生かし、才能ある者を真に認める世界であるのか、と自問する。

これが心広い国なのか。

これが魂を魅了する詩を詩歌を注ぎ出す天才を

無駄にすることのなかった国なのか。

悲しいかな、Butler は頑迷な標的に向かって

鋭い諧謔<sup>ユーモア</sup>の投げ矢を狙いすますのは巧みではあったけれども、

胸に貧困の毒牙の苦しみを味わった。

また悲劇の巨匠 Otway は憐れみ自らが彼に謳うことを教えたが、

不幸の重みの下に倒れたではないか。

雅量なイギリス人はこの事実を聞いたことがあるのか、

そしてその目に義憤の涙を流さないのか。  
(1790 Version, ll. 13-23; Coleridge 13-14)

冷酷な世間の仕打ちの犠牲者としてバトラー (Samuel Butler, 1612-80) やオトウェイ (Thomas Otway, 1652-85) など、貧困ゆえ

にこの世を去った詩人、あるいは世に入れられず憤死した詩人についてのコールリッジの連想は拡大し、1790-1834年版では "Butler" の名前が "Spenser" に取って代えられることになる。スペンサー (Edmund Spenser, 1522?-99)。その生涯の大半をアイルランドの地方官として過ごしたものの、ジョンソン (Ben Jonson, 1572-1636) によれば、晩年はパンがなくてロンドンで死んだ詩人、あるいはフレッチャー (Phineas Fletcher, 1582-1650) によって、"Discouraged, scorn'd, his writings vilified, /Poorly--poor man--he liv'd; poorly--poor man--he died." (*The Purple Island*, 1633, canto 4; Wintle 573) と歌われた詩人である。しかし、コールリッジ自身はとりわけチャタトンの亡霊に憑かれていた。友人の Thomas Poole 宛の手紙で言う。オトウェイやチャタトンの亡霊が目に見え、と。

そうだ、亡霊だとも。僕はもう十分に亡霊に憑かれている。僕は Otway や Chatterton の亡霊、おまけに絶望した妻や飢えた幼な子の幻影につきまといまわることには必至だ。ああ、Thomas Poole よ、Thomas Poole。当てにならないパンのために頭を酷使する父親、そして夫たる者の気持ちがどんなものかを君がわかってくれさえすればよいのだが。  
(To Thomas Poole; Dec. 13, 1796; Griggs I. 275)

不遇の天才。貧窮に襲われ圧迫された挙げ句の自殺。自殺について思いめぐらす詩人。ロマン派特有の自殺志願のハムレット・コンプレックス。天才が飢え死にすることを許す

7 ミルトン (John Milton, 1608-74) の *Lycidas* (1637) の例を引くまでもなく、イギリスの哀歌の伝統に倣って、このモノディも天才の死を悼むと同時に、社会の冷酷無情を告発する弾劾詩、もうひとつの「ああ、無情」(レ・ミゼラブル) の内容となっている。詩人に対して敵対的でさえある世間についてキーツは言う。「イギリス人が世界で最もすぐれた作家たちを生み出した最大の理由のひとつは、イギリスの世間がそれらの作家を存命中は虐待し、死んでから大事にするからです。それらの作家のほとんどは、踏みにじられて生の脇道に追いやられ、社会の苦悩をつぶさに味わったのです」(To Sarah Jeffrey; June 9, 1819; Scott 304)

イギリス社会に対する義憤。抑圧的なイギリスでの自由と文学の存在不可能性。コールリッジに残された唯一の道は海外への脱出 [アメリカへの移住] となる。こうして自殺をロマンティックに美化することから始まった詩は、詩人の政治的立場についてのとりとめのない幻想、ロマンティックかつメランコリックな表現が続いた後、チャタトンがアメリカで彼らのパンティソクラシー<sup>8</sup>の企てに参加するという幻想で結ばれている。新しい社会の展望。チャタトンとの自己同一化を遂げたコールリッジは謳う。拙論のエピグラフとして引用した言葉, "Chatterton shall appear modernized." (To Thomas Poole; April 11, 1796; Griggs I. 119) は、処女詩集の公刊によせて新たに書き加えられた130-165行 (1796年に初めて印刷された) からの一節である。

ああ、チャタトンよ、お前が生きていたら、

きっと大風に船の帆を上げ、

平和で自由な共有地の谷間で、僕ら仲間と共に

鐘を付けた羊の群れを追いかけることを願うだろう。

そして僕らは、穏やかな夕暮れ時、お前の回りに集まって、

その堂々たる歌にうっとり聞き惚れながら、

白髪の老人さながら巧みに古い灰色の古文書の仮面をかぶった

若き瞳の詩歌ににっこり微笑を送るだろう。

(1790-1834 Version, ll. 148-55;

Coleridge 130)

チャタトンこそ、コールリッジが、ことあ

る毎に帰って行き、創作し続けたモノディの主題であった。と同時に、結局は失敗に帰した企て、理想郷建設計画の背後にあった指導精神でもあったのである。

### 第3章 シェリーの『アドネイイス』

コールリッジの<sup>モノディ</sup>哀歌で中心的人物であったチャタトンは、<sup>エレジー</sup>シェリーの哀歌、すなわち *Adonais: An Elegy on the Death of John Keats* でもその中心的人物となる。全編495行からなる詩行のうち、その名はわずかに一度しか使用されていないけれど。

1821年2月23日、キーツはローマの宿舎で25年の生涯を閉じ、同地のイギリス人墓地に埋葬された。『アドネイイス』はその夭折を悼んでシェリーが書きあげた哀歌である。『アドネイイス』を説明してシェリーは次のように記している。作品に対する作者自身の自信と愛着が表明された手紙の一節である。

はなはだ入念な芸術品 *piece of art* です。

恐らく構成の点では、私がこれまで著した何物にもましてすぐれているでしょう。

(To John and Maria Gisborne; June 5, 1821; Jones II. 294)

その神秘主義にも関わらず、私の作品中最も欠点の少ないものです。それは哀れなキーツに対する私の哀惜と敬意のイメージとしてそうあって欲しいと思うものです。(To Charles Ollier; Sep. 25, 1821;

Jones II. 354-55)

この哀歌はシェリーの複雑なチャタトン幻想を理解する上で恰好のテキストである。なぜなら、その異様な点は、哀悼の対象であるキーツその人に対するエレジーというよりも、むしろシェリーがキーツにおいて「夭折の詩

8 パンティソクラシーとは、1794年、チャタトンの故郷ブリストル市で、コールリッジがオックスフォードで相知った詩人サウジーと語らって同志を集め、アメリカのペンシルベニア州の Susquehanna River 流域に建設しようと目論んだ共産主義 [コールリッジの言葉では "aspheterism" (私有財産の否定を唱える説)] を理想とするユートピア的な理想的平等社会のこと。

人」として不可避的な類似<sup>パラレル</sup>を見出したチャタトンその人、すなわちシェリーの思い描いたチャタトン像が表現されているからである。さらに、このチャタトン像はシェリーが同一化を願った詩人像となっているということである。換言すれば、『アドネイイス』は、チャタトンを媒介として、シェリーが理想の自画像<sup>セルフ・ポートレート</sup>を描こうとして企てた試みということになる。その過程を見て行こう。

前述のように、合計55連のスペンサー・スタンザからなる『アドネイイス』で、チャタトンの名は一度しか使用されていない。早世した詩人たちに言及する第45連で、その一人としてその名は登場する。

未だ達成されぬ名声を継ぐ者たちが、  
はるか目に見えぬ世界の、人間の思いを  
超えて  
建てられた玉座から立ち上がった。チャ  
タトンは  
蒼ざめて、その悲痛な苦悩は未だ  
消えやらなかった。シドニーは  
戦い、倒れ、生き、かつ愛した、  
崇高なまでにやさしい、一点の瑕<sup>きず</sup>瑾もな  
い精神。  
そしてルカヌスは、死をもって身<sup>あかし</sup>の証を  
立てた。

「忘却」は、彼らが立ち上がったため、  
叱責された者のように後退りした。

17歳で死んだチャタトン。31歳で死んだシドニー。26歳で死んだルカヌス。シェリーはキーツをこれら早世した詩人たちと重ね合わせる。彼らは地上で名声を達成することなく早世した。しかし、天上で永遠の座から彼らが立ち上がるや、「忘却」は咎めを受けたかのように後退りして消えたというのである。続く第46連でも、名声を博することなくして悲しい最期を遂げたその他の詩人たちの魂が、それぞれの詩人の星に座を構え、人目を眩惑する

ほどの不滅の姿を纏って立ち上がり、アドネイイスのために天に設けられた座を指し示しながら待っている、とシェリーは謳うのである。

シェリーは、これ以前すでに第36連で、キーツとチャタトンとの間に類似<sup>パラレル</sup>の関係を打ち立てている。彼らの死の原因はその天才を認めない悪意ある批評家たちの慢罵によるものだという。キーツの場合は J. W. Croker (*Quarterly Review*, April 1818) や J. G. Lockhart (*Blackwood's Magazine*, August 1818) 等の酷評であり、チャタトンの場合はウォルポールなどから冷評ということになる。いずれも真価を認められずして早世した薄倅の天才たちに対するシェリーの哀惜である。

我らのアドネイイスは毒を呑んだ — おお！

若い人生の杯にこうした悲しみの酒を満たしたのは

どんなに耳のない蝮のような人殺しなのか。

名もない蛆虫もいまでは否定しよう、  
そいつらは魔法の調べ<sup>the magic tone</sup>を感じはしたが逃れた。

その調べの序歌は、やがて歌われる本歌への期待に、

ただひとつの胸に呻いていたものの他、  
あらゆる嫉妬、憎悪、悪を黙らせた —  
しかし

歌う人の手は冷たく、銀の堅琴はもはや  
鳴り響かぬ。

このエレジーの奇妙な点は、詩の主人公たるキーツの特性がいささかも明らかにされていないことである。「我らのアドネイイス」と称されるキーツは毒など呑んでいない。毒を仰いだのはチャタトンである。この詩においては、シェリーが同一化することを願った

そのチャタトンの面影だけが、その特性が著しいのである。実は、さらに以前の第31連で、チャタトンはひとつの「弱々しい形」frail Formとして登場し、シェリーは歓呼の声を挙げているのである。

無名の者の中に、ひとつの弱々しい形が、  
人々の中にひとつの幻影が現れた — 雷  
鳴を弔鐘とする  
消えゆく嵐の最後の雲のように、ひとり  
友もなく。

「弱々しい形」については、解釈が分かれるところである。例えば、ノートン版の詩文選<sup>アンソロジー</sup>の脚注には、"Shelley himself, represented in one of his aspects--like the Poet in *Alastor*, rather than the author of *Prometheus Unbound*." (Abrams II, 725) とシェリー自身の自画像と捉えている。しかし、オックスフォード版の詩文選の脚注には"not so much Shelley, as his antithetical self, the Poet of *Alastor*" (Bloom II, 466)とあり、シェリーと正反対の性格の詩人を想定している。ただ奇妙なことに、両方とも『アラスター』の詩人と捉えている点では一致している。*Alastor, or the Spirit of Solitude* (1816) とは一人の理想主義者の悲劇を描いたテキストである。シェリーの理想の詩人像を仮託した幻想詩であること、また、そこに登場する詩人は理想美を求めさまようものの目的を達することができず、結局、幻滅と絶望の果てに死ぬ詩人であることを考えれば、この「弱々しい形」がチャタトンであってもおかしくはない。事実、前述のNick Groomは、ひとつの論拠としてそのような解釈 (Groom 5) をしている研究者の一人である。つまり、早世の詩人を描くとき、シェリーは *Adonais* にチャタトンの亡霊、その frail Form を召喚したのである。そしてもうひとつの比喩、「ひとつの幻影」A phantom という表現に

も明らかなように、コールリッジと同様、シェリーもチャタトンの亡霊を見るのである。

キーツにこと寄せて歌うシェリーの哀悼の対象であるアドネイスが、実際にはキーツではなくチャタトンであると考えれば、第27連の意味は一層はっきりとする。

おお優しい子よ、お前は美しかったが、  
なぜ人々の踏みならした道を、そんなにも  
急いで離れ、  
心は強くあろうとも、弱い手で  
洞窟の飢えた悪竜に挑んだのか？

シェリーの嘆きは、「優しい子」gentle child、すなわちチャタトンが、時が未だ至っていないのに、「そんなにも急いで」Too soon、新しい詩を作り出し、健気にもウォルポールのような敵に戦いを挑んだのか、ということである。

世に入られずに憤死した不遇の詩人。その象徴としてのチャタトンの偶像<sup>アイコン</sup>がシェリーにもてはやされたことは決して奇妙な現象ではない。時代はピーコック (T. L. Peacock, 1785-1866) が *The Four Ages of Poetry* (1820) において、詩の無用論 [文明の進展とともに社会における詩の必要性は減じ、近代社会では無用であるという詩論] を展開した時代である。翌年、1821年の2月下旬から3月にかけて、シェリーは詩の擁護論 *A Defence of Poetry* を執筆したのである。ピーコックによって詩の不可能性がはっきりと宣言された時代だからこそ、ロマン派の最高の詩学のひとつが脱稿され (執筆 1821, 出版 1840) を、続いてその3ヶ月後に、シェリーの理想の詩人像が瞑想詩『アドネイス』の形で芸術的に表現されたのである。Frank Jones によれば、シェリーは1821年の4月19日頃、同年2月23日のキーツのローマでの客死の訃音に接して、急いで6月初旬に『アドネイス』を書きあげている (Jones II. 663-

64)。それが印刷されるとシェリーはすぐにピーコックに寄贈している。

ギズボーン夫妻経由で『キーツの死に関するエレジー』をお送りします。その主題は、大兄にはお気に召さないことはわかっていますが、詩の構成と趣きは悪くないと思います。判断は大兄と教養ある読書大衆にお任せします。(To T. L. Peacock; Aug. 10, 1821; Jones II. 330)

コールリッジはチャタトン在不凋花 *amaranth* に喩えていたが、シェリーはアドネイイスは死んでアネモネ *anemone* になったと歌う。第20連の「優しい香りの花々」 *flowers of gentle breath* とは、アネモネの語源的意味 [L<Gk=wind flower (*anemos* wind)] に由来し、さらにアネモネはその花が星の形をしているので、「星の化身」 *incarnations of stars* に喩えられている。星の連想を育むアドネイイスの連想は、作品の最終連で活きてくる。そのことについては次章でふれよう。

#### 第4章 キーツの「英語本来の音楽」への憧れ

チャタトンがキーツに与えた影響は計り知れない。例えば、前述のハズリットによるチャタトンの過小評価に敏感に反応してキーツは次のように言う。

ハズリットの連続講演を定期的に聞きに行っています。最後のものは、Grey, Collins, Young その他についてでした。Swift, Voltaire, Rabelais については実に鋭い批評をしてみせてくれましたが、彼の Chatterton に対する取り扱いにはがっかりさせられました。(To George and Tom Keats; 21 February 1818; Scott 95)

無論、キーツはハズリットとは別の取り扱いをしている。例えば、彼の初期の詩のひとつ、1815年11月に書かれた "To George Felton Mathew" という詩である。この詩ですでに彼の生涯のテーマである《森の想像力》とでもいうべきものをキーツは展開している〔キーツにとって森はいつも世の憂いや現実から逃れる場所、隠遁したロマンティックな空間であった〕。この詩でも、森は古代ギリシアの桃源郷、アルカディアのような避難所である。そしてこの理想郷には、詩歌の世界にふさわしい住人としてチャタトンがいるのである。ちょうどコールリッジの理想郷パンティソクラシーにチャタトンがいたように。<sup>9</sup>

キーツは友人のマシュー (George Felton Mathew, 1795-?) に呼びかけて歌う。

それでもここは空しい——おお、マシューよ、  
僕があ乙女に会える場所を見つけられるよう、力を貸しておくれ——  
僕たちが穏やかな人間らしさを身につけ、  
坐して、チャタトンについて詩を作り、  
考えられる場所。(ll. 53-56)

前述のアルヴァレズは、「恐らくロマン派のなかでチャタトンの詩そのものを真に味読し、理解したのはキーツだけだったように思われる」(Alvarez 224) という。その影響はこれまで多くの研究者が指摘してきた。そのひとつがキーツにおけるチャタトンの詩の<sup>エコー</sup>反響である。Gittings, Ting, Morrison, Lau等々の考察はその適例である。他に、中世の情熱に燃えたチャタトンの影響を受けて、キーツも中世詩 *The Eve of St. Agnes* (1819) や *The Eve of St. Mark* (1819年執筆) を著し、そのロマンティックな中世趣味を発揮し

9 チャタトンの名を付して最初に公刊された詩集は1803年のサウジーと Joseph Cottle (1770-1853)の編集によるものであった。Linda Kellyによれば、その「序文」にコールリッジの「チャタトンの詩を悼むモノディ」が載せられており、キーツはそれを読んだという(Kelly 95)。

たことを追加してよいだろう。ちょうどコールリッジが擬古体<sup>アークイズム</sup>を *The Rime of the Ancient Mariner* (1798) で効果的に駆使したり、あるいは韻律とテーマの両方でチャタトンから靈感を受けて、*Kubla Khan* (1797) や *Christabel* (1798-1801) を著したように。

影響の第二は、詩人や文学の名声について、チャタトンの面影がキーツに与えた影響についての考察である。コールリッジ同様、キーツもチャタトンと自分自身との間に類似な関係<sup>パラレル</sup>を見出している。以下はその点についての考察である。

詩作を始めて間もない頃、キーツは「チャタトンに寄せるソネット」"Sonnet to Chatterton" (1815) という詩を書いている。このソネットは、キーツの先輩詩人への賛辞<sup>トリビュート</sup>である。その起句八行ではチャタトンの薄倅の生涯を嘆く。

おお チャタトン！ あなたの運命は、  
なんと悲惨なことか！

悲しみの申し子 — 悲惨の息子よ！

天才がはげしく閃き、気高い思想が深められた

その眼を、死の薄膜は何と早々と覆ったことか。

何と早々と、気高く生き生きとしたその声は、

死者の詩歌の列に入ったことか！ おお！

夜はいかに

あなたの美しい朝と隣り合わせにいたことか。あなたは死んだのだ、

冷たい烈風が散らした、半開の小花として。

キーツの幻想するチャタトンは「悲しみの申し子」*dear child of sorrow*, 「悲惨の息子」*son of misery* である。そして「何と早々と」*How soon* という表現は、シェリーの『アドネイス』第27連の「そんなにも急いで」*Too soon* を想起させる。

キーツは物語詩『エンディミオン』*Endymion: a Poetic Romance* (1818) をチャタトンの思い出に捧げているが、その「序文」で、少年の想像力一般について次のように述べている。「少年の想像力は健康であり、大人の成熟した想像力も健康です。しかし、その間の人生において、魂はしばし動揺し、性格は定まらず、生き方は不確かで、野心は烈しいように思えます」(Allott 119)。これはキーツが自らの想像力について述べたものであるが、このテキストの冒頭には "Inscribed to the memory of Thomas Chatterton" というチャタトンへの献辞<sup>オマージュ</sup>が記された文章がある。無意識のうちに書かれたものであるにせよ、チャタトンの想像力についての見事な解説となっているのである。<sup>10</sup>

さらに、Miriam Allott も示唆しているように、8行目の「冷たい烈風が散らした半開の小花」*A half blown flow'ret which cold blasts amate* は、前述のコールリッジの詩、"On observing a blossom on the first of February 1796" に描かれた花である「不凋花」*amaranth* を反響<sup>エコー</sup>であろう。

ブリストルの楽人、驚嘆すべき青年！

大地がほとんど自らのものにしたと思えず

不毛な侘びしい冬の荒野のまっただ中に

10 チャタトンの想像力についてのキーツの理解は、無論、バイロン (Lord Byron, 1788-1824) の理解、ハント (Leigh Hunt, 1784-1859) 宛の手紙のなかで述べた次の一節とは対照的である。「一般的に、詩歌への耽溺は『不安な身体に宿る不安な精神』(an uneasy mind in an uneasy body) の結果である。……チャタトンは、思うに、狂っている」(To Leigh Hunt, Nov. 1815; Wintle 159)。キーツの詩を "Johnny Keats's piss-a-bed poetry" (To John Murray; Oct. 12, 1820; Wintle 383)、あるいは "Such writing is a sort of mental masturbation—he is always f-g-g-g his Imagination." (Ibid.; Nov. 9, 1820; Wintle 383) と称する毒舌家バイロンならではの失礼なコメントである。

咲き

ついに、失望の時が訪れ、つまらない過ちゆえに

大地に叩きつけられる不凋花

真冬に咲く花を見てチャタトンを思うコールリッジ同様、キーツもチャタトンの名声が「不凋花」であることを謳い、また、詩人を健気に咲く小さな花に喩えるキーツに、読者は彼の《受容の美学》を想起してもよいだろう。彼は次のように「詩」というものを健気に咲く花に喩えていた。

隠れたところに咲いている花はなんと美しいことでしょう！ 大通りに群がって、「私はスマイレです、賞めて下さい！ 私はサクラソウです、可愛がって下さい！」などと叫んだら、花の美しさはなんと失われてしまうことでしょう。(To J. H. Reynolds; Feb. 3, 1818; Scott 87)

この手紙から二週間後、キーツは次のように記している。「花のように花びらを開いて、受け身になり受容的になりましょう」"let us open our leaves like a flower and be passive and receptive" (*Ibid.*; Feb. 19, 1818; Scott 93)と。キーツ独自の想像力論のひとつの展開である。

キーツが惹かれたチャタトンの魅力は、前述のソネットで明らかにしているように、その特徴的な声、「気高い、生き生きとした、その声」that voice, majestic and elateであった。その声について、ウォッツ＝ダントン (Theodore Watts-Dunton, 1832-1914) — ロセッティやスウィンバーン (A. C. Swinburne, 1837-1909) の同時代人で、ロ

マン主義の特質のひとつを「驚異の復興」Renaissance of Wonder と要約し、チャタトンをしてその「受肉」("the renaissance of wonder incarnate"; Watts-Dunton xi) とまで言ったヴィクトリア朝の文人・批評家 — は次のように言う。彼もチャタトンの音楽に注目しているのである。

これまでも指摘してきたことだが、チャタトン研究者たちは、誰も彼も、彼の耳を支配している独自の音楽的動向 a peculiar musical movement を見落としているようである。それはどんな近代的な言葉をもってしても、彼の擬古体や擬似擬古体に、 — それらが彼本人が発明したものであれ、Bailey や Speght の本のなかに見出せるものであれ — 取って代わることは不可能である。チャタトンは、全般的には18世紀の動向に支配されていたにもかかわらず、時々、注目に値する耳の独創性を示したのである。彼のこの韻律上の発明の才は、Tyrwhitt以降、チャタトンの批評家によって少しも認識されてこなかった — 問題にもされなかったことは明らかである。(Watts-Dunton 260)<sup>11</sup>

批評家はどうかあれ、詩人たちは認知していたのである。シェリーが『アドネイイス』の第36連で、詩人の奏でる音楽を「魔法の調べ」the magic tone と呼んでいたことを想起しよう。

キーツは「秋に寄せるオード」*Ode to Autumn* を執筆した2日後、友人に次のような手紙を送った。

11 辞書編纂家 Nathan [Nathaniel] Bailey (d. 1742) は *Bailey's Universal Etymological Dictionary* こと *An Universal Etymological English Dictionary* (1721) で知られている。Thomas Speght (*fl.* 1598) は、国語の教師で、*Glossary to Speght's Chaucer* や *The Works of our ancient and learned English Poet, Geoffrey Chaucer* (1598) の編集で知られる。Thomas Tyrwhitt (1730-86) は古典注釈者で、*The Canterbury Tales of Chaucer* (5 vols., 1775-78) を編集して Chaucer の韻律法を明らかにした他、《ローリー詩篇》はすべてチャタトンの贋作であることを立証した。

どういうわけか、僕はいつもチャタトンと秋の季節を結びつけて考えます。彼は最も純粋な英語で詩を書く作家です。彼にはチョーサーのようなフランス語風の語法や表現がありません。英語で書いた本当に英語らしい語法なのです。僕は『ハイペリオン』を中断したままでいます。ミルトン的な語順転倒が多すぎたのです。ミルトンのような詩は、技巧に腐心するような、つまり芸術家を気取った気分にならなければ書けないものです。僕たちは英語を守って行かなければならないと思います。 (To John Reynolds; Sep. 21, 1819; Scott 345)

また、別の手紙では、チャタトンの英語を評して次のようにも言う。

最も純粋な英語、あるいは最も純粋であるはずだと僕には思われるものはチャタトンの英語だ。英語はたいそう古くからある言語だから、チョーサーのフランス語特有の語法によっても完全に墮落させられることはなかったし、今でも古い単語が使われている。チャタトンの言語は完全に北方系のものだ。僕はミルトンの脚韻で刻まれた音楽よりも、チャタトンの英語本来の音楽の方が好きだ。 (To George and Georgiana Keats; Sept. 17-27, 1819; Scott 379)

詩人を「世界の非公認の立法者」the unacknowledged legislators of the world というのはシェリーの『詩の擁護』を結ぶ言葉、すなわちシェリーの詩人の定義であったが、キーツは詩人を、いわば「世界の非公認の言語学者」だと言うのである。無論、よく知られたキーツの誤解ではあるけれど、キーツはチャタトンこそ「最も純粋な英語で詩を書く作家」the purest writer in the English language と言及し、その「最も純粋な英語」

[the] purest english の「本来の音楽」the native music に対する彼の好みはチャタトンをして彼の英雄にしているのである。このことから、Ivan Phillips が指摘しているように、キーツが詩人を「国民の声を保管する高潔な文書館員、あるいは英語本来のメロディを回復する者」"the poet as a pious archivist of the national voice, a restorer of the original English melody" (Phillips 17) であると見なすロマン派の見解を承認していると考えても間違いではない。言葉は人々の思考の産物でありながら、個々の思惟を超えている。詩人が「非公認の言語学者」であることを納得させる上記の手紙の文面は、常日頃から言葉に気を配っている詩人キーツならではの言葉である。キーツは文化的な保守主義者なのである。

キーツのチャタトン崇拜は高じて、意識的なトリビュート賛辞として「献辞」の形を取った。キーツはチャタトンの思い出に『エンディミオン』を捧げたのである。それは次のようになっていた。"Inscribed / with every feeling of pride and regret, / and with "bowed mind," / To the memory of / The most english of Poets except Shakespeare, / Thomas Chatterton--" (Gittings 50)。「シェイクスピアの次に最もイギリス的な詩人」であるチャタトンは、キーツにとっての巨星に他ならない。

「チャタトンに寄せるソネット」のセステット終わりの6行ではキーツは次のように謳う。

だが、これも過ぎ去ったこと。あなたはいま、

至高の天の星々に囲まれている。めぐりゆく天体に、

あなたは甘美に歌いかける。あなたの聖なる歌を損なうものは何もない、

この忘恩の世界や人間の怖れのかたなでは。

この地上では、善き人があなたの美しい  
名に  
卑しい中傷の指を差させず、涙でそれを  
洗っている。

前述のシェリーはこの箇所を読んでいたに違  
いない。哀歌『アドネイス』の最終連第55  
連は次のように結ばれている。この結び方は、  
意識的な操作であれ無意識のものであれ、上  
記のキーツのテキストに酷似していないか。

巨大な大地と天球のような大空は引き裂  
かれる！  
私は、暗黒の中を、恐怖のうちに遠くへ  
運ばれる。  
その一方で、天空の奥底を貫き燃え、  
アドネイスの魂は、星のごとく、  
永遠の棲み家からである天から我らを招  
く。

今やアドネイスの魂は天にあり、そして  
「詩人の星」として燈台 beacon のように輝  
き招くというのである。

### 第5章 カメレオン詩人たち

キーツは「詩人には自我がない」(To  
Richard Woodhouse; Oct. 27, 1818; Scott  
195) と言う。なぜだろうか。20世紀の詩人  
エリオット (T. S. Eliot, 1888-1965) の場合  
は、詩のリアリティを詩人の生活上の感動と  
は別次元のものであると考えたからであるが、  
キーツの場合には、それは詩人が「カメレ  
オン」だからということになる。

キーツは、所謂「詩的性質」the poetical  
Character—自分自身は無でありながら同時  
にすべててになり得る資質、すなわち、想像

力豊かな詩人にとっては重要な柔軟性である  
と同時に、すぐれた文学者なら誰もが共有す  
る資質の特性—を説明しながら、彼が一年前  
に開陳した「消極的／自己否定的能力」  
Negative Capability の典型として挙げたシェ  
イクスピア<sup>12</sup>に、再度、次のように言及する。  
キーツはこの第一級の国民的詩人を直截に  
「カメレオン詩人」と言う。

詩的性格そのものについて言えば、(中略)  
詩的性格は、それ自身ではない—それは  
自我を持っていない—あらゆるもの  
であると同時にまた何ものでもない—  
それは性格を持っていない—光を受け  
容れば影も受け容れる。喜びの中に生き  
るが、その喜びは、清いものでも汚れた  
ものでも、高くても低くても、豊かでも  
貧しくても、卑しくても高貴でも構わな  
い。それはイアーゴのことを考えてもイ  
モジェンのことを考えるのと同じくらい  
に大きな楽しみを味わう。徳の高い哲学  
者にショックを与えるようなことでも、  
このカメレオン詩人 the camelion Poet  
を喜ばせる。(To Richard Woodhouse;  
Oct. 27, 1818, Scott 194-95)

この議論で注目すべきは、おのれを消して一  
切に同化するところの「詩的性格」は、悪役  
イアーゴにも徳婦イモジェンと同じ喜びを見  
出すということである。It has as much  
delight in conceiving an Iago as an Imogen.  
換言すれば、「詩的性格」とは、第一義的に  
amoral、すなわち道德規準を持たないとい  
うこと。第二義的には、道学者 the virtuous  
philosopher が眉を顰めるようなことでも喜

12 キーツにとって生涯変わることのない永遠のヒーローはシェイクスピアであった。文学において偉大な仕事を達成する人間を形成する特質の体現者だったからである。そのシェイクスピアが膨大に所有していた能力、文学的天分の代表的なものとしてキーツが説明しているものが「消極的／自己否定的能力」である。その特性は、「不確定、不可解、疑惑の状態にあっても、事実や理由をいらだたく追求しないでいられる能力」(To George and Tom Keats, 21 December 1817; Scott 60)と規定し、その状態に達すれば、詩人にとっては「美」のみが唯一絶対のもの、それさえあれば他のものは一切考慮に値しないものとなっている。

ぶほど undisciplined, すなわち節操のない、放埒であるということ。これら点は、「芸術は半端じゃない強烈さ」"The excellence of every Art is its intensity." (To George & Tom Keats; Dec. 21, 1817; Scott 60), あるいは「詩は美の過剰な驚き」"Poetry should surprise by a fine excess, and not by Singularity." (To J. H. Reynolds; Feb. 3, 1818; Scott 97) 等々の詩論を展開したキーツの一連の手紙の趣旨と通底している。

また、キーツがシェイクスピアを「カメレオン詩人」と称していることは、シェイクスピアの想像力が創造した永遠不滅の人間類型ヒューマン・タイプの一人、Henry VI, Part III (1590) に登場する Richard, 後の Richard III の台詞 (3 Henry VI, 3.2.191-5) を思い起こせばよいだろう。その野望実現の意志を王位篡奪者は次のようにあらわにする。

色を変えることでは俺はカメレオンにもまさる、  
形を変えることではプロテウスもかなうまい、  
残忍さにかけてはマキャベリさえ俺の弟子だ。  
そのような俺が、王冠一つ取れんというのか？  
ばかな！ 引き剥がしてでもこの手にせずにおくものか。

七変化する「カメレオン」chameleon や、変幻自在の海神「プロテウス」Proteus, 目的のためには手段を選ばない「マキャベリ」Machiavel. シェイクスピア同様、イモジェンにもなればイアーゴにもなるという amoral で undisciplined な想像力の持ち主キーツ、まさしく「贗作文士」チャタトンの末裔に他ならない。

「消極的／自己否定的能力」論を展開した後、キーツは続けて詩人の「没個性」論を展

開する。

詩人というものはこの世に存在するものの中で最も非詩的な存在だ。というのも詩人はアイデンティティを持たないのだから。詩人は絶えず他者の中に入って行きそれを満たしているのだ」(Ibid.; Scott 195)。

「詩的性格」を有する詩人は、詩作の過程でその個人的アイデンティティを捨て去り、個性を没却して無になることで、すべてになれる。続いて、「詩人は絶えず他者のなかに入って行きそれを満たす」。このようにして、詩人は矛盾も対立も受け容れ、「カメレオン」のように状況に応じてさまざまに色を変えることが可能になるというのである。換言すれば、キーツは同一の手紙の前段で、まずシェイクスピアを「カメレオン詩人」と呼び、それを敷衍してすぐれた詩人はすべて「カメレオン」だというのである。

無論、コールリッジとて、その例外ではない。彼は風が吹くにつれて鳴る「アイオロスの琴」をロマン派詩人の象徴として謳った詩、"The Aeolian Harp" (Aug. 20, 1795) を残した詩人であった。前述の I. A. Gordon の論文によれば、コールリッジが「チャタトンの死を悼むモノディ」を詩作していたとき、その内容はさながら「カメレオンのように」chameleon-like 変貌を遂げていたという。曰く。「コールリッジの Monody は、カメレオンのように、変化する周囲の状況からさまざまな色調や、机上にある読みかけの書物からのさまざまなイメージを採っている」(Gordon 50)。事実、その内容は詩人の気分ムードやその生きた時代の移り変わりと共に変化している。それはコールリッジ自身の絶えず変化する芸術観に一致して変化し続けてきたとも言えるのである。つまり、「チャタトンの死を悼むモノディ」は、折々変貌するコール

リッジの詩観、理想の詩人像を反映する詩、カメレオン詩人の《カメレオン詩》に他ならない。

シェリーもまた詩人を説明して、カメレオンの比喻を用いていたことを想起したい。「詩人たち — その最良の者たちは、まさしくカメレオンの一族です。彼らは餌とする食料の色を帯びるばかりか、その下を通り過ぎる葉の色にさえ変化するのです」 Poets, the best of them--are a very camæleonic race: they take the colour not only of what they feed on, but of the very leaves under which they pass (To John and Maria Gisborne; July 13, 1821; Jones II. 308). また、シェリーはカメレオンの比喻を詩 "An Exhortation" (1820) という詩の冒頭で用いている。「カメレオンが食べるのは光と空気、詩人の食料は愛と名声である」 Chameleons feed on light and air: Poets' food is love and fame (ll. 1-2).<sup>13</sup>

カメレオン詩人は、「名声」 fame に憧れる。そして彼らの脳裡に去来するのは過去の偉大な詩人たち、先行する詩人たちである。カメレオン詩人たちは、所謂「ロマン派の美学」、すなわち「作家の内面的真実に文学評価の基準を置いたロマン派の批評原理」（磯田153）よりも、むしろ伝統に根ざした感受性に文学評価の基礎を置くという方が正解であろう。I. A. Gordon の説明によれば、コールリッジがモノディの詩作の過程でたどった先行詩人との格闘、受容のプロセスは、「Dryden, Chatterton, Bowles は Gray に取って代われ、そして Gray は Milton に、Milton は Wordsworth に（もっともその影響は否定的なものである）、そして最終的に

は Wordsworth 的禁止条項は Johnson と Goldsmith に取って代わられることになる」（Gordon 50）という。確かに、モノディのテキストにはさまざまな作家の亡霊の存在が存在する。しかし、一貫して強烈なのはチャタトンの亡霊である。

キーツにとって「名声の殿堂」はその人生における極星であった。『エンディミオン』（1818）の公刊について語った手紙の中で言う。「詩の名声 poetical fame についての僕の考えはあまりに高いために僕にはその名声が頭上遙かにそそり立っているように見えます」と言い、続けて「これが完成すれば、たとえ十数歩でも名声の殿堂 the Temple of Fame に近づくことができるだろうと思いません」（To Benjamin Bailey; Oct. 8, 1817; Scott 42）と記している。あるいは、キーツは生前に「僕は、死後、英国の詩人たちの中に列せられることになるだろう」"I think I shall be among the English Poets after my death." (To George and Georgiana Keats; Oct. 25, 1818; Scott 199)とも言っている。

無論、キーツの「没個性」論が、後のエリオットの詩論に通底することは言うまでもない。キーツの「詩人は絶えず他者のなかに入って行きそれを満たす」 he is continually in for and filling some other Body の「他者」 other Body という語を「伝統」 tradition という語に置き換えたとき、それはエリオットの *Tradition and the Individual Talent* (1919) へと展開されることになるのである。エリオットはそのエッセイの結末部で「没個性」 impersonality を簡潔に力説し、エッセイ全体を総括する結びの言葉として次のように言う。

13 日本のダダリスト詩人、中原中也（1907-37）も「空気の中の蜜」を食べた詩人である。中也の「ゆきてかへらぬ」という詩に、「空気の中には蜜があり、物体でないその蜜は、常住食するに適していた」（嵐山 347）と記しているが、彼もまた不遇の天才詩人であった。

芸術の情緒は没个性的である。The emotion of art is impersonal. 従って、詩人がこのような没個性に達するためには、自分の今からなそうとしている仕事に全身を打ち込む他に道はない。しかも詩人は、単なる現在であるばかりでなく、過去が現存する瞬間ともいべきものの中に生きるものでなければ、また、単に死せるもののみならず、すでにもう生きているものをもまた意識するものでなければ、恐らく何をなすべきかを知り得ないであろう。(Kermode 44)

これまで見てきたように3人の詩人たちは、理想の対象と同化する詩、所謂「カメレオン詩人」である。そして今一度想起しよう。トマス・チャタトンこそ架空の詩人トマス・ローリーと同化して、《ローリー詩篇》をモノした「カメレオン詩人」その人であったことを。

### むすびに

拙論の結論は、奇しくも前述のウォッツ＝ダントンが *The Poetry and the Renaissance of Wonder* (1916) のなかで指摘していたことを確証することになってしまった。チャタトンの影響について次のように記されている。

チャタトンの影響は、主としてロマンスの偉大な王、コールリッジ自身を通して作用した。コールリッジは（ひとつにはチャタトンのブリストルとの繋がりかもしれないが）、チャタトンの生涯の悲劇的な哀感<sup>ベーンズ</sup>、および彼の作品（実際に書かれたものと書かれたであろうものの両方）の卓越性に深く感動した。また、コールリッジ自身がイギリスのロマン主義復興運動全般に及ぼした影響、特にシェリー

とキーツに及ぼした影響、さらにはこの二人が後続の詩人たちに及ぼした途方もない影響を考えるならば、新しいロマン派の主人公 the protagonist of the New Romantic school の座をチャタトンに拒むのは不可能なように思われる。(Watts-Dunton 260-61)<sup>14</sup>

イギリスのロマン派詩人たちはチャタトンの影の下に生きた。しかし、チャタトンの影の下に生きていたのは詩人たちだけではない。イギリスには1901年創立の The British Academy という人文学と社会科学のための研究機関がある。その機関誌である *The Proceedings of the British Academy* には、毎年恒例の講演が掲載される。英米文学関連の分野としては、英詩についての "Warton Lectures on English Poetry" (1910年創設)、シェイクスピアについての "Shakespeare Lectures" (1911年創設)、アメリカ文学／歴史についての "Sarah Tryphena Phillips Lectures in American Literature and History" (1961年創設) などがある。そして、特筆すべきは、"Chatterton Lectures on Poetry" (1955年創設) である。英国学士院のホームページには次のように説明されている。

詩に関する「チャタトン＝レクチャー」。この講義は Gray's Inn 所属の E. H.W. Meyerstein の遺志によって創設された。遺産は過去のイギリス詩人（「英語で書いた過去の詩人」と解釈されている）の生涯と作品について、40歳以下の講師によってなされる毎年の講義を創設するための基金としてその用途が定められた。発会の第1回目の講義は、1955年、「チャタトン＝レクチャー」の創設者である

14 ウォッツ＝ダントンが「ロマンスの偉大な王」the great lord of romance と呼ぶコールリッジについて、Virginia Woolf (1882-1941) が次のように言っていること明記すべきであろう。"Coleridge the innumerable, the mutable, the atmospheric; Coleridge who is part of Wordsworth, Keats, and Shelley; of his age and of our own." (Woolf 69)

E. H. W. Meyersteinについて Lionel Butler が講義した。

それ以降、半世紀近くに及ぶこれまでの講義の中から精選、編集されたものが *English Poets: British Academy Chatterton Lectures* (OUP, 1988) である。Dr. Johnsonの *The Lives of the Poets* (1779-81)、あるいはハズリットの *Lectures on the English Poets* (1818) に比肩する、名実ともに現代版『イギリス詩人伝』といった趣のある講演集となっている。その目次にはイギリスのエスタブリッシュメントの大学で教鞭を執る錚々たる研究者たちがその名を連ねている。イギリスにおいて「チャタトン=レクチャー」は、若き英文学研究者の登竜門となっていると言ふべきか。

それでは、その創設者であるマイヤースタインとは、一体、何者か。研究社の『英米文学辞典』（第三版）にさえその名は記されていない。実を言えば、今回初めて「チャタトン=レクチャー」の創設者が、チャタトン研究における記念碑的業績、*A Life of Thomas Chatterton* (1930) を著したマイヤースタインその人であったことを知り、大いに知的興奮を覚えたのである。この研究を評して川村泉氏は次のように絶賛している。

本書は索引を加へて本文五百八十四頁に互る大部の書であつて、その主眼とするところは序文にも明らかにされてゐる如く、Rowley Poems を English Poetry として評価すること、及び幾多資料によつて、同時代の環境の中に詩人 Chatterton の眞實の姿をみようとするにある。従つて Rowley Poems に關する一文は誠に勝れた論文である。資料は巨細に互り蒐集され、巧みに整理され、眞に研究の名に價する好著である。數多い傳記中最も信頼し得る名著である。(川村 148)

チャタトンについての啓蒙書 *The Marvellous Boy: The Life and Myth of Thomas Chatterton* (1971) は、最終章の「詩人伝記作者」The Poet Biographer でマイヤースタインのチャタトン研究を論じて次のように総括している。

1930年、忘却にも等しい年月の後に記念碑的研究が現れた。あらゆる意味で記念碑的で、詩人のほんのわずかの短い生涯が六百ページ近い大著に力を与えている。控え目に『トマス・チャタトンの生涯』と題されているが、実際には決定版の伝記である。長年の研究と調査の成果であつて、標準的な伝記としては凌駕される見込みはない。神話と感傷センチメンタリティは排除され、しばしばチャタトンの不愉快な性格にも光が当てられる。しかし、本書はその客観性にも関わらず、愛情こもった作品である。著者 E. H. W. マイヤースタインにおいて、チャタトンは再びそのチャンピオン擁護者を見出したのである。彼は、詩人で、そのチャタトンの対する強い愛情、その強烈さは、強迫観念的であり、ロマン派の強い愛情と結びついているのである。(Kelly 130)

この研究書のエピグラフにはシェイクスピアの *As You Like It* からの一節が取られている。チャタトンのすべてを物語るようなエピグラフである。道化タッチストーンに向かつて、田舎の娘オードリーは言うのである。「何なのさ。詩的って？ やることや言うことに嘘がないってこと？ つまり眞実ってこと？」"I do not know what 'poetical' is: it is honest in deed and word? is it a true thing?" (3.3.14-15)<sup>15</sup>

参考文献

- Abrams, M. H., et al, eds. *The Norton Anthology of English Literature*. Sixth Edition. 2 vols. New York: W. W. Norton, 1993.
- Ackroyd, Peter. *Chatterton*. Hamish Hamilton, 1987
- Allott, Miriam, ed. *The Poems of John Keats*. Longman Annotated English Poets Series. London: Longman; New York: Norton, 1970.
- Alvarez, A. *The Savage God: A Study of Suicide*. 1971. Bloomsbury, 2002.
- Bloom, Harold, et al. *The Oxford Anthology of English Literature*. 2 vols. Oxford: OUP, 1973.
- Coleridge, Ernest Hartley. *The Complete Poetical Works of Samuel Taylor Coleridge*. 2 vols. Oxford: OUP, 1912.
- Eagleton, Terry. "Maybe he made it up," *LRB* 24/11 (June 6, 2002): 3 & 6.
- English Poets: British Academy Chatterton Lectures*. Oxford: Clarendon Press, 1988.
- Feeman, Arthur and Yeodre Hofmann. "The Ghost of Coleridge's First Effort: 'A Monody on the Death of Chatterton.'" *The Library*, 6th series, 11 (1989): 328-335.
- Gittings, Robert. "Keats and Chatterton." *Keats-Shelley Journal* 4 (1955): 47-54.
- Goldberg, Herbert. "Romantic Professionalism in 1800: Robert Southey, Herbert Croft, and the Letters and Legacy of Thomas Chatterton." *ELH* 63 (1996): 681-706.
- Gordon, I. A. "The Case-History of Coleridge's Monody on the Death of Chatterton." *RES* 18 (1942): 49-71.
- Griggs, Earl Leslie, ed. *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge*, vols. 1-6. Oxford: Clarendon Press, 1956-1971.
- Groom, Nick, ed. *Thomas Chatterton and Romantic Culture*. Palgrave Macmillan, 1999.
- Hamlyn, Robin. "BOYS IN ART--CHATTERTON." Online. Internet. Nov. 19, 2004. Available: www.friedrichshainerschule.de/WALLIS.htm
- Harmon, Maryhelen C. "Melville's 'Borrowed Personage': Bartleby and Thomas Chatterton." *A Journal of the American Renaissance* 33 (1987): 35-44.
- Haywood, Ian. *The Making of History: a Study of the Literary Forgeries of James Macpherson and Thomas Chatterton in Relation to Eighteenth-century Ideas of History and Fiction*. Rutherford: Fairleigh Dickinson UP, 1986.
- Hazlitt, William Hazlitt. *Lectures on the English Poets & The Spirit of the Age; or Contemporary Portraits*. Everyman's Library, 1910, 1955.
- Ingram, John H., *True Chatterton: A New Study from Original Documents*. T. Fisher Unwin, 1910.
- Jones, Frederick L. *The Letters of Percy Bysshe Shelley*. 2 vols. Oxford: Clarendon Press, 1964.
- Kelly, Linda. *The Marvellous Boy: The Life and Myth of Thomas Chatterton*. London: Weldenfeld and Nicolson, 1971.
- Kermode, Frank. *Selected Prose of T. S. Eliot*. London: Faber and Faber, 1975.
- Lamb, Charles. *The Essays of Elia and the Last Essays of Elia*. The World's Classics. Oxford: OUP, 1954.
- Lau, Beth. "Protest, 'Nativism,' and Impersonation in the Works of Chatterton and Keats." *Studies in Romanticism* 42/4 (2003): 519-39.
- Magnuson, Paul. "Coleridge's Discursive 'Monody on the Death of Chatterton.'" *Romanticism on the Net* 17 (Feb. 2000) Online. Internet. Oct. 25,

15 生き続けるチャタトン伝説について最後に一言。『ニュースの天才』というアメリカ映画（ギャガ＝ヒューマックス共同配給、2003年）がある。アメリカのメディア界で実際に起きた事件の映画化で、権威のあるニュース雑誌の編集部で働く最年少記者による捏造事件にまつわる物語である。原作はピューリッツァー賞受賞作家 Buzz Bissinger が *Vanity Fair* 誌に寄稿した記事だという。事件の真相は、特ダネ「ハッカー天国」というスクープ記事を書いた記者がネタの提供者に騙されたのではない。ソフトウェア会社もハッカー少年も実在しない。すべて記者の捏造記事であった。表面上のテーマとして、誤報・剽窃・捏造などのジャーナリズムの弊害、人気ジャーナリストの暴走とそれを許容した職場や社会、そして雑誌記者の栄光と転落をリアルに描いているが、その眼目は未成熟で病的な若者の悲劇であり、一人の青年の青春、活力、才能の浪費という悲劇は、まさしく21世紀版チャタトンの物語であって、チャタトンの状況を想起させる『ニュースの天才』という邦題（原題は *Shattered Glass*）は事件の核心を見事に衝いた名訳であるといえる。

2004. available: <http://users.ox.ac.uk/~scat0385/17monody.html>
- Martin, C. G. "Coleridge, Edward Rushton, and the Cancelled Note to the 'Monody on the Dream of Chatterton,'" *RES*. N. S. 17/68 (1966): 391-402.
- Meyerstein, E. H. W. *A Life of Thomas Chatterton*. London: Ingpen and Grant, 1930.
- Morrison, Lucy. "Chatterton and Keats: The Need for Close Examination." *Keats-Shelley Review* 10 (1996): 35-50.
- Mullan, John. "Wonderful whelp?" *TLS* No. 5110 (Mar. 9, 2001): 25.
- Phillips, Ivan. "Beyond the marvellous boy." *TLS* No.4981 (Sep. 18, 1998): 17-18.
- Rawson, Claude. "Schoolboy glee," *TLS* No. 4753 (May 6, 1994): 3-4.
- Rollins, Hyder E., ed. *The Keats Circle*. 2 vols. 2nd ed. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1965.
- Ruskin, John. *The Worksof John Ruskin*. The Library Edition. Eds. E. T. Cook and Alexander Wedderburn. 39 vols. London: George Allen, 1903-1912.
- Scott, Grant F., ed. *Selected Letters of John Keats*. Revised ed. Based on the texts of Hyder Edward Rollins. Harvard UP, 2002.
- Taylor, Donald S. *The Complete Works of Thomas Chatterton*. A Bicentennial Edition. 2 vols. Oxford: Clarendon Press, 1971.
- . *Thomas Chatterton's Art: Experiments in Imagined History*. Princeton: Princeton UP, 1978.
- Ting, Nai-Tung. "The Influence of Chatterton on Keats." *Keats-Shelley Journal* 5 (1956): 103-108.
- . "Chatterton and Keats: A Reexamination." *Keats-Shelley Journal* 30 (1981): 100-117.
- Walpole, Horace. "A Letter to the Editor of the Miscellanies of Thomas Chatterton." *Gentleman's Magazine* 52 (April, 1782):189-95.
- Watts-Dunton, Theodore. *Poetry and the Renascence of Wonder*. London: Herbert Jenkins, 1916.
- Wintle, Justin and Richard Kenin, eds. *The Penguin Concise Dictionary of Biographical Quotation*. Harmondsworth: Penguin Books, 1981.
- Woolf, Virginia. "The Man At the Gate." *The Death of the Moth*. London: The Hogarth Press, 1942, pp. 69-77.
- 嵐山 光三郎. 『文人悪食』 マガジンハウス, 1997.
- 磯田 光一. 「伝統と個人の才能」平井正穂編 『20世紀英米文学案内18 エリオット』 研究社, 1967.
- 川村 泉. 『チャタトン』 (研究社英米文学評伝叢書28) 研究社, 1935.
- 小松 左京/高階秀爾. 『絵の言葉』 講談社学術文庫, 1976.
- 高橋 康成. 『シンポジウム英米文学4 ロマン主義から象徴主義へ』 學生社, 1975.
- 富田 義介. 「最後の日の Chatterton (1)-(5)」 『英語青年』 Vol. 58, nos. 2,5,7-8 (Oct. 15, Dec. 1, Dec. 15, 1927; Jan .1, Jan. 15, 1928): 62, 166-67, 197, 240, 276.
- 宇佐美道雄. 『早すぎた天才——贋作詩人トマス・チャタトン伝』 新潮選書, 2001.